
ずっと好きでもいいですか？

若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ずっと好きでもいいですか？

【Nコード】

N0769I

【作者名】

若

【あらすじ】

のんきでマイペース。そして「男」というものが嫌いな私。ダケド…。ダケド…。先生…。貴方は別だよ。

プロローグ（前書き）

今回も先生と生徒の禁断の恋のお話！！ぜひっ見てくださあいつ
（
^O^）

プロローグ

「春」

「桜がきれ」

中学校生活初日。

私の名前は

中村 夢 (12)

「ほらっのんきな事行つてないでっ学校行きなさいっ」

私の母はのんきでマイペースな私に比べて凄くしつかりしている。
私は父親が居なく母と二人で生活している。

父は私が幼い頃に家を出ていった。

母は

「父さんは他の女と出ていった」

と言っている。

その日から私は

「男」というものが苦手だ。

「行つてきまーす」

「気をつけてねっ今日もお母さん遅くなるから」

「分かった。」

お母さんは父親が居なくなつてから働くようになった。
そのためお金には困っていなかった。

「夢」

「あつ佑!」

「何ボーっとしてんのよっ」

この子は、斎藤 佑

小学校からの親友で唯一佑だけには父親の事などを話している。

「佑はいつも元気だねっ」

「夢はいつも穏やかだねっ」

「なんだそれっ（笑）」

なんて会話していた。

ここまでは、いつも通りな私っ！！

そーだよ。

先生に出会うまで。

こんな日常が変わるなんて思わなかったよ。

ブローグ（後書き）

どーでしたかあ？今回も頑張っていくので、応援ヨロシクお願いします！！若でしたあっ

第1話：出会い

キンコンカーンコン。

「あつ夢。私席着くねっ」
と佑が席へと向かった。

今日も一日平凡に終わるんだろーな。
なんて思っていた。
担任が入っていつも通りな日々だった。
やっぱりまだ中学生になりたてな私達。
やることと言えば、生徒手帳の写真撮影。クラス写真。などなど。
案外忙しい。

いろいろしているうちに時間は過ぎていった。

「さようなら」

「はいっさようならっ」

担任と挨拶をし、皆それぞれ教室から出ていく。

「じゃっ！夢！私拓也と帰るからあ」

「はあいっばいばあい」

なんて元気の無い挨拶。

あつ拓也というのは佑の彼氏。

佑は小学校から付き合ってる。案外長い。

私はゆっくり帰り帰る仕度をしていると、皆帰ってしまいクラスは私一人。

私はなんとなくで窓へと向かった。

「眺め最高だな」

なんてのんきな事を言っていると…

後ろから、

「まだ帰ってないの??」
と言われた。

「あつすいません。すぐ帰りますっ」
と頭をペコリと下げ顔を上げる。

そこには、青年(?)が立っていた。

「あつあの…」

「あつ一年生だもんねっ知らないかぁ。僕は英語の教科担任の深澤 恭輝!よろしくっ」

「あつ…えつとお。先生だったんですかぁ」

「よく言われるんだぁ(笑)子供ばいでしょっ!
僕っ(笑)」

ドキッ

なんだ…私…

なんか胸が痛いっ

「あつすいませんっつい…同級生かなあ…って」

「いいよっ全然ってかなんか話さない??」

「えっあついいですよっ」

私はその〜深澤先生とお話をした。

学校の事とか

友達の事とかっ

「あつもうこんな時間になっちゃったあ!!送るよっ」

「えっあの…いいんですか??」

「だって僕が話したかったただけだしねっじゃあ靴箱の前で待ってて」
「あっはいっ」

私は靴箱へと向かった…。

何っ

なんなのよ。

この胸の痛みはっおかしいしっ

私っ！！

なんて考えてたら、いつの間にか靴箱に着いていた。

「おーいつこつち、こつち！！」

「あっ！！はいつ」

先生に案内され車に乗りこんだ。

黒色で、男の人が乗りそーな車だった。

「あっそいえばっ名前何！？」

「あっ夢です。中村 夢。」

「へー。夢かぁ可愛い名前だねっ」

ドキドキ…

「夢って呼んでいい？」

「あっいいですよっ全然！」

「分かった！じゃあ早速。夢さぁ家案内してねっ当たり前だけど

先生、夢ん家わかんないからさっ」

「あっはいつえっところ右ですっ」

「はぁいつ」

まだ着かないでっ

なんて思ってる私はおかしい？？

「着いたっゴメンねっ今日はとめちゃって」

「いいですよっ私、深澤先生と話してて楽しかったし。」

「本当にっ??また話しかけてよっ僕も話しかけるからさっ!!相
手してくれよっ(笑)」

「はいっ(笑)じゃあまた明日っさようならっ」

「うんっB Y E - B Y Eっ」

深澤先生の車が消えるまで私はずっと見ていた。

ガチャっ

ドアを開ける。

また現実へと引き付けられそうになったけど、先生を考えると、な
んか違う私が居た。

第2話：英語と放課後と気付いた気持ち

今日は…

英語の初授業っ

深澤先生なんだよねっ

頑張ろっ

「お母さんっ行って来るねっ」

「うんっ頑張ってねっ気をつけてっ」

「はぁいついつてきまあすっ！！」

「佑っおはよ」

「おーっ夢っおっはぁ」

私は胸が弾んでたっ

先生の授業は3時間目！

楽しみなのはきのせい？

1時間目…

2時間目…

刻々と時間は過ぎていった…

そして待ちに待った3時間目っ

ガラガラっ

ドアが開く！

「始めまあすっ」

深澤先生が入って来た！

やっぱり見た目は同級生ぽいなあーっ

そう思ってたらっ

「夢っ！頑張ろーなっ」深澤先生が私の方に小さな声で言ってきた！
「うっうんっ」

そして授業は始まった。

なんか小学校の復習的な感じで、英語で自己紹介しようっみたいな感じ。

やっぱりさあ

楽しみにしてたものは時間が過ぎるのが早いねっ
すぐ終わっちゃった。

キンコンカンコン。

「今日の授業はこれまでありがとうございましたっ」

「ありがとうございましたっ」

授業が終わった。

そしたら、

「夢っどーだったあ？」

俺の授業は」

「うんっ楽しかったあっ！さすが深澤先生っ（笑）」

「マヂっ！？良かったあ！！明日から普通にあるからなっわかんないところあれば言えよっ」

「うんっ頼りにしてるっ」

「じゃあ次の授業も頑張れよっ」

「うんっB Y E - B Y E っ」

私はなぜか、前より先生と気軽に話せていた。

「ちよっとお！！夢っ深澤先生とめっちゃめっちゃ仲良いじゃないっこのこのおいつの間にいっ」

佑がからかって来た。

「うーんつまあねっ（笑）」

なんて言ってごまかした。

後の授業はテキスト。

そして帰る時間がやって来た。

「皆さん気をつけてねっさようならっ」

「はいっさようならっ」

がやがやっ

一気に教室が騒がしくなる。

「佑っ今日も拓也と帰るの？ごゆっくりねっ」

「うんっB Y E - B Y Eっ拓也行こっ」

と言って佑は帰った。

また教室に一人かあ…。

私が帰る仕度をしていると、そこに一人のどっかで見えた事のある、
深澤先生じゃない

「男」が居た。

「じゅ…准。」

「ようっ久しぶりだなっ夢っ」

私がもう一つ

「男」が嫌いな原因となる

「男」がそこに居た。

一年前

「付き合っして下さいっ」

六年生の夏。

私はこの最低男、一宮 准に告白された。

私は、はっきり言って准が好きだった。両思いってやつ。
「はいっ」

私は即返事をした。
付き合ってから毎日が楽しかった。
遊園地も行っだし、
水族館も行っだし、
買い物にも行っだし、
映画館も行っだし、

そして准とキスもした。
准とならしてもいいと思ったから。
でも現実是最悪だった。

付き合って三ヶ月が過ぎようとした秋。

私は教室に忘れ物をし取りに行った。
そこには、教室で准と他の男子2人が話してた。

「おいっ 准っ お前何人と付き合ってたんだよ（笑）」
「うーんっ 他校も合わせて…ざっと7人かなっ（笑）」
「お前さいてー（笑）」

「だってさあゝ 気に入った女に告って、テキトーにキスしときゃ誰
だってホイホイくるんだよっ（笑）」
「じゅっ… 准っ」

准達が一斉に私を見た。
それから、私達は話さなくなった。
本当に最悪だった。
どん底だった…。
それから本当に
本当に信じれなくなってしまった。

「男」というものを…。

「淮っなんなのよっ話しかけないで!!」

「ずいぶん強気だなあ」

一歩ずつ淮が近寄る。

後退りする私。

「何よっ来ないでっ」

「なんだよっ離れなくてもいいだろ…。お前今

「男」居ないんだろ!」

「だから何よっアンタには関係ないじゃんかつ!あっ」

私は壁に着いていた。

「はいっ行き止まりだなあ!!」

お前さあゝまた俺の女にならねえ?」

手首を壁へ付けられて身動きが出来ないっ

「嫌だよっアンタなんか!!大嫌いなんだから!!」

強いっ

離れないっ

「まだそんな事言うのかよっじゃあ…」

「…んっや…め…て!!」

淮にキスをされた。

涙が出た。

嫌だっ

こんなキス…。

長く深いキス。

でも私のしたい人じゃないっ

廊下から足音がした…。

やっと唇から准の唇が離れた。

「チツ…じゃあ考えとけよ…。」

と一言いい、准は去った。

私は崩れた。

涙が止まらなかった。

最悪だ…。

こんなキス。

そう思っていると…。

「夢??どうしたっ!!」

泣いている私の所に深澤先生が来た。

「深澤先生…私…私…」

「いいよっゆっくりでいいから…」

そう言って私は深澤先生に抱き着いた。

深澤先生も優しく私の頭を撫でてくれた。

何分経っただろう…。

いや…何時間かもしれない…。

「あっ私…深澤先生ゴメンっ…抱き着いたりして…。」

「いいよ…。そんな事…。どうして泣いてるのか、言える範囲でい

いから言って?」

「うん…。」

深澤先生は

「言える範囲」って言ったけど、私は先生にすべて話した。

一年前、私と准が付き合ってた事。

でも、准は私一人じゃなく他の人とも付き合ってた事…。

そして、泣いてた原因、准にキスされた事。

しかも、無理矢理…。

「そうか…。辛かったな。ゴメンなっ先生がもっと早く来ていれば、

キスされずにすんだかもしれないのに…。助けてやれないで…。ゴメンなっ」

「うんっ 深澤先生は悪くないよ。深澤先生にこうやって話せた事で少しスッキリしたし。ありがとうねっ」

先生はまた私の頭を撫でていや…。くしゃくしゃっとして、

「夢は偉いなー！！頑張ったっ」

と言ってくれた。

本当はっ

本当は泣きそうだったけど…。

我慢した…。

その日も深澤先生に送ってもらった。

「ゴメンねっ また送ってもらっちゃって…。」

「いいよ。僕、夢と話すの好きだしっ（笑）じゃあなっ！！」

「うんっさようならっ」

私はまた先生の車が見えなくなるまで見送った…。

そしてねっ

気付いたの…。

私っ

深澤先生は

「男」だけど、

「特別」だって…。

私…

深澤先生が好きなんだって…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0769i/>

ずっと好きでもいいですか？

2010年11月20日03時09分発行